

ECO Educational Computing Newsletter News

No. 68

2000.8

発行=21世紀教育研究所

所長 中山和彦

©

〒305-0045 茨城県つくば市梅園2-33-6

TEL 0298-50-3321 / fax 0298-50-3330

E-mail econews@green.ocn.ne.jp

UHL http://www/eri21-unet.ocn.ne.jp

Contents

巻頭 国民教育改進黨議の審議を注目しよう	中山和彦	1
スタディノート・バージョン5を使って「スタディノートのメーリングリスト」に参加する方法	余田義彦	3
スタディノートを活用した総合的な学習の時間への取り組み ~ 小学校 5年 メダカの研究 ~	滑川市立西部小学校	5
お知らせ ホームページちょっぴり更新しました ダウンロードできる教材が増えました		8

国民教育改進黨議の審議を注目しよう

とんでもない答申に国民は声をあげよう

中山和彦

教育改革国民會議の発足

小淵前総理大臣の私的諮問機関として「教育改革国民會議」の第1回全体會議が開かれたのが3月であった。この會議の冒頭の挨拶で、前総理は『我が国の明るい未来を切り拓き、同時に世界に貢献していくためには、創造性こそが大きな鍵であり、創造性の高い人材を育成することが、これからの教育の大きな目標でなければならないと考えております。こうした観点から、私は、教育改革を内閣の最重要課題に位置づけ、「教育立国」を目指し、社会の在り方まで含めた根本的な教育改革について議論していただくために「教育改革国民會議」を開催することにいたしました。』『私は、教育は国家百年の大計と常々申し上げており、皆様には百年の大計をつくるという思いで、腰を据えた、密度の濃い議論を積み重ねていただきたいと思います。すなわち、教育改革とは何ぞやという原点に立ち返って、戦後教育についての総点検をするのが必要であると思います。』『これからは、個人が組織や集団の中に埋没する社会ではなく、個人が輝き、個人の力がみなぎってくるような社会に転換することが求められております。』と述べている。

総理補佐官として、この會議の世話役をしている町村衆議院議員(自民)は『戦後の日本の社会や教育を形作ってきたいくつかの基本的な理念、平等でありますとかあるいは自由とか権利の主張、こういうものの良かった点もあるだろうし、またその弊害というか、問題点もかなり教育界には見られているのではなからうかと。そんなふうに思っておりまして、日本人の軸

を再構築するといったようなことが、この會議の1つの原点としてあればいいのかなと思っておりますし、そういう意味でこの教育基本法の御論議もいただけるのではないかと、こう思っております。』『国民會議という名前は、将来的には国民運動的な広がりを持つものの出発点というものに、その出発点だというような位置づけであればいい...』と挨拶で述べている。

4月の第2回會議で森総理は、小淵前総理の思いを継承することを述べた後に『教育の目標は「学力だけが優れた人間」を育てることではなく、創造性豊かな「立派な人間」を育てることになると思います。私は教育基本法の見直しも含め、「教育は何のためにあるのか」、「学校は何のためにあるのか」を率直に問い直し議論すべき時期にきていると考えております。』『これからの教育においては、まず第一に、思いやりの心、奉仕の精神、日本の文化・伝統を尊重する気持ちなど、人間として、日本人として持つべき豊かな心、倫理観、道徳心を育むことが必要であると思います。』『教育をめぐる諸問題は、国民的な議論が必要であると思います。このため、今年の夏ごろを目途に中間報告をお取りまとめいただき、その後広く国民の皆様のご意見に耳を傾けていただきながら、更なる検討をお願いしたいと存じます。』と挨拶している。

冒頭発言からの問題点の指摘

両総理の発言では、内閣の最重要課題として教育改革を行う 国民會議であり、国民の意見に耳を傾ける ということが示されている。

これは、この会議の性格、今後の運営について述べたものだが、ここで非常に注意しなければならないことは、教育改革の必要性が教育界や国民の間から叫ばれてこの会議がつけられたのではなく、官邸主導、いわば政治家の考えによってつけられたものであり、それに国民会議という名称を付している点である。森総理の発言の後段と町村補佐官の発言「国民会議は、将来的には国民運動的の広がりの出発点である」とを併せて考えると、国民教育改革会議という名称のこの会議で出された提案が、国民の意思ということで、将来、国民に強制的に押しつけられる危険性を示しているのではないかと思われる。

また、この会議の目的について、両総理、町村補佐官の発言は何れも「戦後教育の見直し」を述べ、会議の命題として「教育基本法の改定」を求めている。その理由は、最近の青少年の犯罪、学校の荒廃を直すためというところである。しかし、そのようなことが焦土と化した日本において、世界の恒久平和と人類の文化発展を祈ってつけられた、世界で最高の教育理念を示している教育基本法を変える理由になるだろうか。いや、ならないと思う。教育基本法を変えたからといって最近の問題の解決にはならない。最近の問題は現行の枠内でも解決しようと、私には考えられる。どうも私には、政治家が自分たちに都合の良い教育をさせるために邪魔になる教育基本法を改定し、その後好きなことをしようとしている企みとしか考えられない。

先生方は、教員採用試験に備えて読んだことはあるでしょうが、ぜひもう一度「教育基本法」を熟読して、私の言っていることが間違っているかどうか、自分で考えていただきたい。

この会議が目指すこれからの教育について、森総理は「まず第一に、思いやりの心、奉仕の精神、日本の文化・伝統を尊重する気持ちなど、人間として、日本人として持つべき豊かな心、倫理観、道徳心を育むことが必要」と述べ、町村補佐官は「自由・平等・権利の主張は学校教育からなくせ。そして、日本人の軸を再構築せよ」と言っているように聞こえる。一体どのような軸を持ってきたいと考えているのか、まさか「神の国」ではないであろうが、大いに気になるところである。

分科会での審議とその報告の問題点

国民教育改革会議は全体会の形で5月上旬まで4回開かれた。その後、「第1分科会・人間性」「第2分科会・学校教育」「第3分科会・創造性」を大きなテーマとする3つの分科会で各々4回程度審議をし、その結果が7月下旬に各分科会の報告として出された。

各分科会の報告には、我々国民として問題を感じる内容があるが、最初に、一番問題が大きいと思われる第1分科会の報告について取り上げてみる。

この報告は「日本人へ」、「具体策の例」、「教育基本法について」という3つの部分からなっている。「日本人

へ」の最後に「第1分科会の議論をもとに 文責 曾野綾子」と記されているので、彼女の手によって書かれたことが判る。作家によって書かれた文であるので、内容は文学的というか理念的というか、また、彼女の考えをむきだしにしたためか挑戦的でもあり、役所の筆による一般の報告とは異なり、私のような理工系の者には、何回読んでも何を言いたいのか内容が理解できない箇所も少なくない。

「日本人へ」は7つのセクションで構成されているが、重要だと思われる箇所をピックアップしてみる。『物質的豊さと平和の中で』では、「近年、日本の教育の荒廃は、見過ごせないものがある。…その背景には、物質的豊さと、半世紀以上も続いた平和があった」として、そのために人間性を伸ばすせなくなったとしている。『人生の最初の教師』では、「教育という川の流れの、最初の水源の清冽な一滴となり得るのは、家庭教育である」として、父母の役割をかくあるべきだと論じ、両親が人生で最初の教師であるとしている。『教育で道徳を教えるのにためらう必要があろうか』では、「小学校においては『道徳』、中学校においては『人間科』、高校においては『人生科』として、教師だけではなく経験豊かな社会人も教える。」「『教育の日』を制定する」ことにより、「地方公共団体は毎年教育目標を定めることが可能になる」としている。『奉仕の志』では、「小学校と中学校では2週間、高校では1ヵ月間を奉仕活動の期間として適用する。これは、すでに社会に出て働いている同年代の青年達を含めた国民すべてに適用する。そして農作業や森林の整備、高齢者介護などの人道的作業に当たらせる。指導には各業種の熟練者、青年海外協力隊員のOB、青少年活動指導者の参加を求める。これは一定の試験期間をおいてできるだけ速やかに、満1年間の奉仕期間として義務付ける。…障害者もできる範囲ですべての奉仕活動に加わるから、彼らもまた新しい世界を発見し、多くの友人を得るだろう」と、奉仕を教育の内容として課することと、その意義を記している。これに関連して『具体的方策の例』で「共同生活による奉仕活動などの義務化（まず小・中2週間、高校1ヶ月とし、将来的には満18歳の全ての国民に1年間の奉仕期間を設定）」と記している。

第1分科会の報告が、「日本人へ」という言葉で書き始められていることは、高い立場に立っている人が、国民はかくあるべしと言っているように感じる。私のような年老いた人間には、小学校の時に暗記させられ、しょっちゅう唱えさせられた「教育勅語」を思い出させる。また、満1年間の共同生活による奉仕活動は、徴兵制度を思い起こさせる。

このようなことが、日本の教育の中で実施されてよいのであろうか。大いに疑問である。

次号で検討を続けたい。

(21世紀教育研究所 所長)

スタディノート・バージョン5を使って 「スタディノートのメーリングリスト」に参加する方法



スタディノート・バージョン5が導入されている学校は、スタディノートのインターネット掲示板を使って、「スタディノートのメーリングリスト」に参加することができます。以下では、その方法を紹介합니다。

1. ノートの「書こう」で、以下の文書を作成する

ノートの題名は「メーリングリスト参加希望」にして下さい。

ノートの本文には、学校名、所在地、Tel、Fax、担当者名を入力して下さい。

Fax番号および担当者名は、トラブル発生時に必要ですので、必ず入力して下さい。

The screenshot shows a window titled 'ノートを書こう' (Write Note) with the subject 'メーリングリスト参加希望' (Mailing List Participation Request). The text area contains the following text:
スタディノートのメーリングリストへの参加を希望します。
学校名: ○○市立○○小学校
所在地: ○○県○○市○○○○○-○○○
Tel.: ○○○○-○○-○○○○○
FAX.: ○○○○-○○-○○○○○
担当者: ○○○○

2. 1で作成したノートをメールで送信する

「インターネット」を選び、アドレス帳の欄は「メールアドレス」にします。

「どこへ」の欄に、yoden@cs.kasei.ac.jpを入力して、「ポストへ」ボタンをクリックします。

The screenshot shows the '電子メール' (Send Email) dialog box. The '送ろう' (Send) button is active. The configuration is as follows:
どこへ (Where to send): インターネット (Internet)
アドレス帳 (Address book): メールアドレス (Email address)
どこへ (Where to send): yoden@cs.kasei.ac.jp
手紙の題名 (Subject): メーリングリスト参加希望 (Mailing List Participation Request)
A 'ポストへ' (Post) button is visible. A note at the bottom says: 「アドレス帳」の「どこへ」送る？あて先をえらんだら「ポストへ」ボタンをクリック

3. スタディノートのメーリングリスト用のインターネット掲示板を設定する

管理プログラムで「電子掲示板」を選び、「新しい掲示板」ボタンをクリックします。

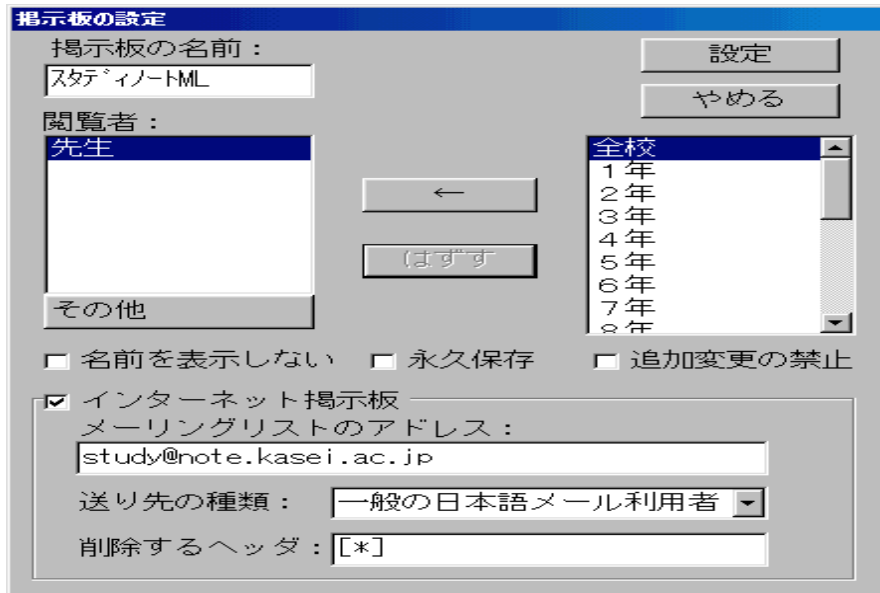
次の画面例と、そっくり同じになるように設定して下さい。

- ・ 先生だけ閲覧できるようにするため、閲覧者を「先生」だけにします。
- ・ インターネット掲示板のところにチェックを入れます。
- ・ メーリングリストのアドレスとして、study@note.kasei.ac.jpを入力します。

このアドレスは「スタディノートのメーリングリスト」専用です。

他のインターネット掲示板にまで、このアドレスを登録しないように注意して下さい。

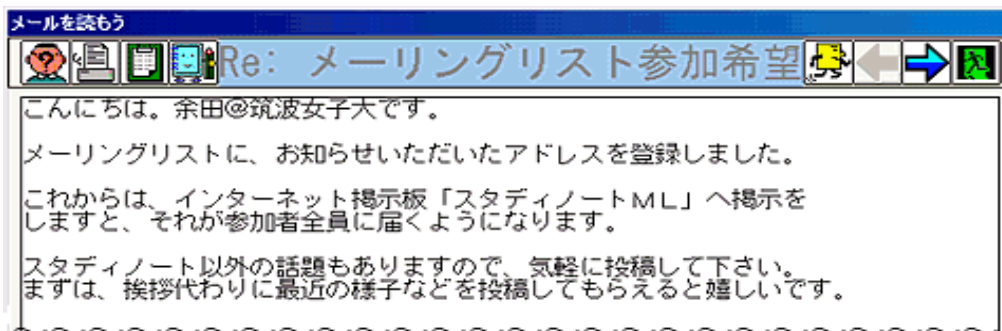
- ・ 送り先の種類は「一般の日本語メール利用者」に設定します。
- ・ 削除するヘッダの欄には、[*]を半角英字で入力します。



4. 参加受け付けのメールが届く

次のメールが届いたら、手続き完了です。

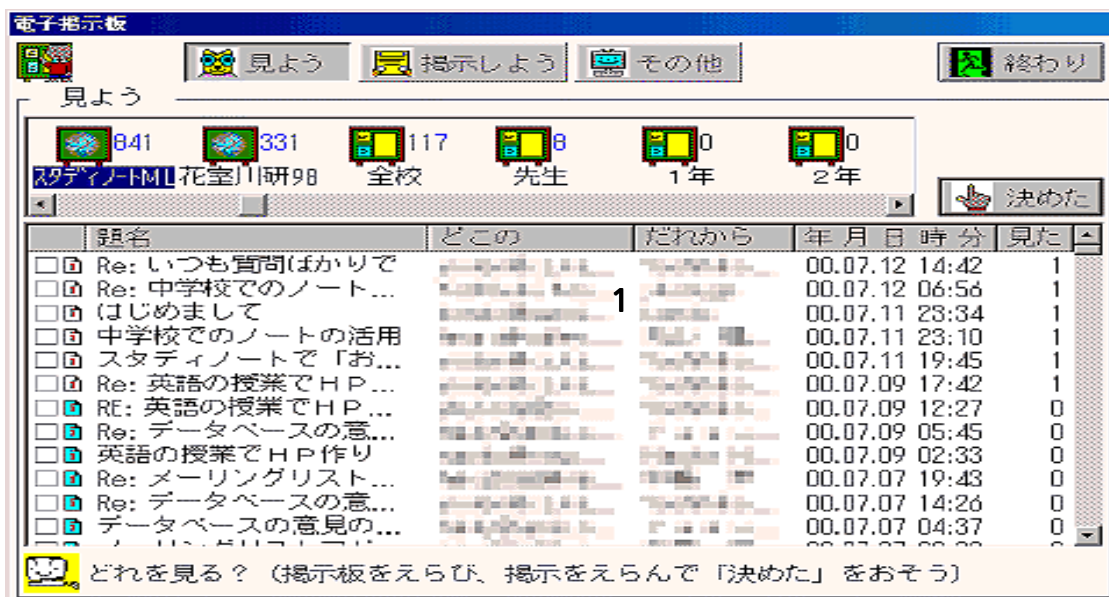
インターネット掲示板「スタディノートML」にメールが届き始めます。



5. 「スタディノートのメーリングリスト」を購読する

インターネット掲示板「スタディノートML」には次の画面例のようにメールが届きます。

この掲示板に掲示をしますと、全国の購読者に同じ内容のメールが届きます。



(筑波女子大学 助教授 余田義彦)



スタディノートを活用した総合的な学習の時間への取り組み ～小学校 5年 メダカの研究～

滑川市立西部小学校

滑川市立西部小学校では、「総合的な学習の時間」に向けて、自ら学び、自ら考え、問題を解決する主体的な子供の姿をめざし、その支援の在り方について研修を進めてきました。

私たちは子供の学ぶ姿を次のように考えました

まず、子供は素材と出会います。このとき、その素材がおもしろければ、じっくり見たり触ったりするうちにその子なりの気づきが生まれます。さらに触れ合う時間を充分とることで、子供の中にああなりたい、こうなればいいなという思いや願いが出てきます。この思いや願いをもとに、子供たちは自分で追究したい課題をつくります。この段階での課題は、子供にとってあいまいであることが多く、ここで一斉学習の場を設け各自の課題をはっきりさせます。課題を見つけた子供は、自分の考えた方法で追究を始めます。中には、課題を作り直したり見直したりする子供もいますが、追究の中で課題をいつも振り返ることを大切にします。

課題追究の中で、子供たちは情報を受発信したり、体験を積み重ねたり、地域の人とかかわりあったりすることで、自分の学びをつくり上げていきます。このさまざまな情報や、人との出会いや体験が太陽やジョウロの水の恵みとなって子供は大きな木に育ちます。そして、学びが深まったところで自分たちがふくらませた情報を他に向けて発信します。この大きくなった木の花は、個々の子供の学びの足跡であり、その子の気づき、学んだ力となります。



3つの研究仮説を立てました

研究仮説1: 子供が主体的に学習課題を見つけることができるように、地域素材を生かした教材開発の工夫をすることによって、生き生きと学ぶ内的動機をもつ子供になる。

研究仮説2: 一人一人の思いや願いを大切にし、一人

一人にあった適切な支援をしながら、互いに認め合い、高め合う場を工夫することで、自分の学習を創りあげていこうとする子供になる。

研究仮説3: コンピュータの活用を工夫することにより、情報を主体的に活用する子供になる。

「メダカ探検隊」

この仮説をもとに研修したことを5年「理科」「総合的な学習の時間」の扱いとして取り上げた題材『メダカ探検隊』の学習を通して報告します。

子供が目を輝かせ、感動や驚きの気持ちをもちながら自分の課題を意欲的に追求する教材は、地域の中にあります。私たちは昨年度の「ホタルイカ」の実践や日々の子供の姿からそう確信し、今年度も地域の材に目を向けてみました。そして、今年度は、地域の中で発見されたメダカに焦点をあてました。

仮説1 地域素材を生かした教材開発の工夫

子供たちは、昨年自分たちの西部校区で野生のメダカを発見しました。今まで水槽で飼育されているヒメダカしか見たことなかった子供たちにとって自然の中で見るクロメダカは驚きと喜びを与えてくれました。と同時に、子供たちの心に「今後もずっと生息してほしい。」という願いが生まれました。この思いが子供たちを地域へ飛び出させる原動力となったのです。まず、子供たちはメダカランドの観察やゴミ拾いを始めました。活動しながら、「メダカを守りたい。守るためにはどうしたらよいのだろう。」と真剣に考えていきました。「守れ西部のクロメダカ」「メダカの学校を大切に」「絶滅の危機のメダカを救い出せ」「メダカカレンダー」といった子供たちが作ったスタディノートの表紙から子供たちのメダカに対する熱い思いが分かります。



メダカの個体数、生態、一緒に棲んでいる生き物、メダカランドの環境、水など様々な課題を見つけ、学習を始めました。そして、ますますメダカに愛情を深め、一

つの課題だけに終わることなく、次々と問題が生まれ追究していきました。

【K児の追究】

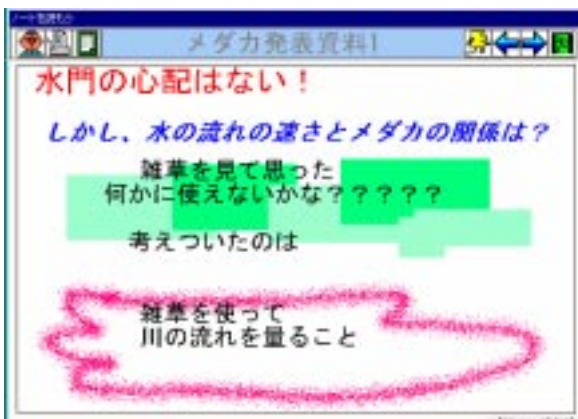
K児は、初めにメダカは何を食べているのかなど、餌を調べました。その後、みんなで校区にメダカがいないか調べてみたら、メダカは絶滅の危機におちいつていることを知り、どうして少なくなったのか、昔はどこにメダカがいたのかを知りたいと思い、アンケートをとって校区のメダカマップを作りました。その結果から、昔はどこにでもメダカが棲んでいたことが分かりました。そしてなぜ今、少なくなったのかなど疑問をもち地域のおばあちゃんにインタビューしました。

一人一人の課題は違うけれども、最終的な思い、メダカを守りたいという願いはみんな同じです。総合的な学習の時間として取り上げた地域教材は、一人一人の子供に内的動機を与え、その子らしい学びを追究させていくことができました。

仮説2 一人一人の思いや願いを大切に学習を創りあげていった子供の学び

【自分で問題を解決し、学ぶ喜びを味わったS児】

S児は、水族館の学芸員の先生からメダカランドでメダカの棲息の鍵をにぎっているのは水門だと教えてもらいました。メダカランドにいつまでもメダカに棲息してほしいと願っているS児は「もし、水門が開けられたらメダカが流されていなくなってしまう」と思い、水門のことを調べたいと考えました。しかし、誰に聞いたらよいのか困っていたので、教師は耕地整理について詳しい地域の人を紹介しました。水門の開閉について心配していたS児は、水門が開ざされた理由や閉ざされる前の土地の様子をインタビューし、今後水門を開けるといことがないと聞いてほっとしたようでした。しかし、S児の追究はさらに進み、今度は川の水流の速さを計り始めたのです。その計り方は、歩数で川の距離を測り、葉を流して時間を計り、水の流れの速さを求めました。S児の頭の中では、メダカの棲息には水の流れが大きく関係しているのではないかと疑問が生まれたのです。川の流れを自己流のやり方で計測していったS児は、10m 3分以上の緩やかな流れならメダカ的环境に適しているという結論を出しました。



S児の考え方には本当に驚かされ、思わず拍手を送り、『S君すごい！』と声をかけました。S児の喜びの顔を見て、この学習はこの子にとって意義のある学習だったと確信しました。

【自然に対する優しさを示したN児】

N児はメダカランドを見たとき、『なんて汚れたところにいるんだろう。せめてゴミを拾ってきれいにしてやりたいな』と思い、観察にいくたびに川に落ちているゴミを拾いました。しかし、川の中に入ってゴミを拾えば、水深の浅いメダカの棲み家に入人間が入り込んで、かえって環境を壊すのではないかと考えました。そこでN児はゴミ取りロボットを作ることにしました。初めは水にぬれても大丈夫な棒を2本とガムテープを選びましたが、ガムテープはぬれるとはずれるので、針金に換えました。製作したゴミ取りロボットを持って、N児はメダカランドでゴミ拾いを試しました。しかし、ゴミには届くけれどすくい上げるのがうまくいかず、また行き帰りの持ち運びもとても大変でした。そこで、ゴミ取りロボッ



ト2号機を作ろうという新たな意欲がわいてきました。新しいアイデアを加え、少しずつ改良して、自分なりのゴミ取り機を仕上げ、メダカランドのゴミを拾って、きれいにできたN児はとても満足していました。

メダカのために川をきれいにしてやりたいという優しい思いから、N児は苦手な工作にも積極的に取り組むことができたのだと思います。教師が一人一人の思いを認め、共感し、子供の思いに沿った支援をすることで、子供は自信を持ち活発に学習を進めていくことにつながったと考えられます。

仮説3 コンピュータの活用について

本校のコンピュータの活用における基本方針は、「コンピュータを学習の道具として活用する」ことです。具体的には次の通りです。

- 1 子供の問題解決を重視し、主体的に子供が活用する
- 2 自分らしさを表現する
- 3 自分の考えをつくりあげたり、見直したりする
- 4 他と積極的にかかわりを求める

次に実際の活用について、子供の活動を中心に紹介します。

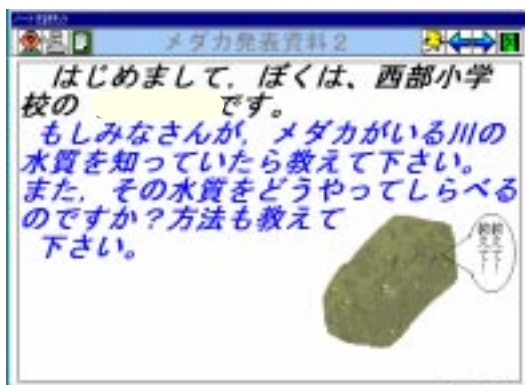
【学校や校区という枠から飛び出し、仲間を見つけ、問題を解決するY児】

メダカランドの出会いから、Y児はメダカの数や様子について調べていました。自分で調べたことをまとめていくうちに、Y児は自分の住んでいる西部校区にもっとたくさんのメダカがいてほしいという願いが強くなりました。友達と協力して調べると、校区で4カ所もメダカがいることが分かり、もしかしたら他の校区にもメダカがいるのではと考え始めました。このとき、担任は滑川市立寺家小学校の池にメダカが育っているとの情報を得ていましたので、教師間で連絡をとり、研究発表会の日にテレビ会議システムを利用して協同学習の機会を設けました。Y児はテレビ会議で、寺家小学校や寺家校区にメダカがいないか、さかんに質問したり自分の思いを語ったりしていました。自分のほしい情報に気づき、自ら学びのネットワークをつくらうとする意欲が、それまでの学校と地域の人々というスタイルにこだわらずに追究を深めたのだと思います。そして、他の学校の友達と同じ問題で語り合うことで、大切な仲間としてかわりあう喜びに気づいたと思います。今後もこのような経験を広めていきたいと思っていますし、それが自分の足元を見つめる学習の大事な要素になる考えています。

【インターネットを利用したI児】

スタディノートは、インターネットツールを強化したバージョンが発売されスタディノートとインターネット導入校であれば、子供自身が専用の電子掲示板や電子メールを使い、スタディノートのデータそのもので簡単に情報のやりとりができるようになりました。

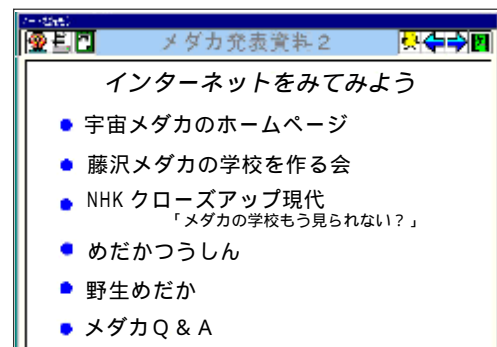
I児はメダカランドの水質に非常にこだわりました。メダカランドでメダカの数が少ないのは、環境破壊が原因であると考えました。この思いを追究の土台にして、I児は自分がもっていた水の性質を調べる試薬を使い水質検査を行いました。メダカランドの水には鉄が含まれていることとアルカリ性であることが分かっただけで結果を自分なりに意味付けることができませんでした。そこで、教師の助言で、I児は、専用電子掲示板「川の研究室」に今まで自分でまとめたことを掲示しヒントをもとめました。すると茨城県つくば市立並木小学校の児童からバックテストについての情報が寄せられました。



分からないときは、疑問を発信すれば少なくともだれかが答えてくれる、一度も会っていない人が自分のために心をこめた情報を送ってくれるなどインターネットのよさをI児は感じ取ったと思います。

インターネットの利用については、「ヤフーキッズ」などのサーチエンジンを使い、情報を検索、収集した児童もいました。しかし、サーチエンジンによる検索結果は多種多様で、同じ項目検索でも内容とまったくあっていなかったりレベルが高すぎて理解できないことが多くあります。また、無制限の情報検索は時間がかかりすぎ、有害性のあるものと出会う可能性をもっています。

私たちは、情報の取り方を学ぶのではなく、「情報を学びに生かす力」を高めることを大切にしたいと考えました。そこで、インターネットの情報検索を、小学校の図書室のように利用できないかと考え、まず教師が関係のあるホームページをチェックし、スタディノートでホームページのリンク集を作りました。これは、教師が子供の実態を把握し、ある程度目的にあったホームページ先を指定しておくものです。実際に宇宙メダカのホームページにアクセスするなど先生が作ったメダカリンク集の活用により、課題に適した情報と出会い、質の高い資料収集や選択につながる事が出来たと思います。



【一年生生活科での実践の紹介】

今年度の実践がいくつかある中で、1年生の生活科「みつけた秋であそぼう」について紹介します。1年生が学校の周辺や行田公園に出向き、秋を見つけることで、そこから得た喜びやうれしさをまとめたものです。

1年生は、観察途中の思いの記録や学習のまとめとしてデータを作り、作品の保管庫としてスタディノートを利用しています。

Mさんは、どんぐりや落ち葉でリースをつくり、それを自分と一緒に画像に写してノートにはり、落ち葉やどんぐりの絵を書いて「あきいっぱい」をまとめました。本物に勝る物はないけれど、そのとき心にひかれた落ち葉や気持ちを保管し、それらをいつでも思い起こせる画像は感動を呼び起こします。作品を見た友達が「かわいいイチョウとおちばだね。よくそんなかわいいはっぱができたね」と感想を送ってきました。Mさんが自分で見つけた秋を絵で一生涯懸命にあらわそうとした願

いや、見つけた秋に友達どうしが相互に親しみを感じとっていることが分かります。

Nさんは1本の木を見つけ、その葉っぱの色の変化から季節の移り変わりをとらえようとしていました。特に最後の「ぼくは、わくわくしています。みんなもそうだよね。」の文章からは、「コンピュータ」対「人」ではなく、コンピュータの向こうにいる人を強く意識し、かわりあうための道具として活用しようとしていることが分かります。

Tさんは、自分でまとめたものに自分でマラカスで演奏した音を入れました。

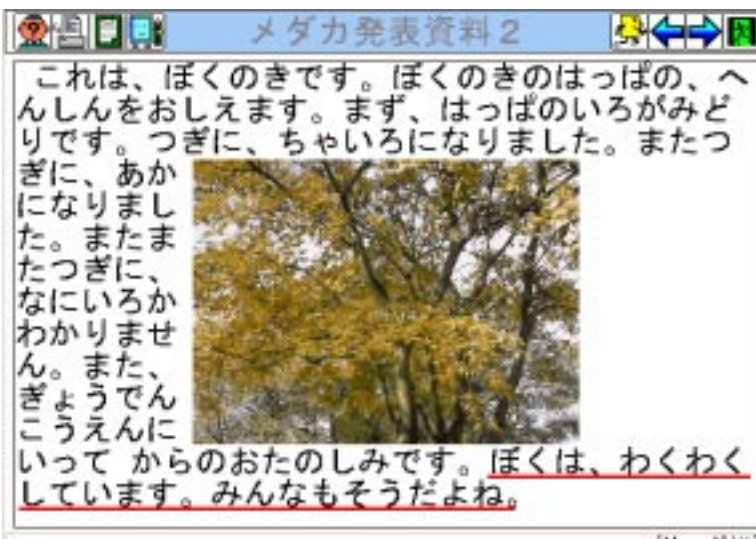
1年生でもコンピュータを道具として活用しています。リテラシーの獲得という大変に聞こえますが、コンピュータを教えるのではなく、コンピュータと向き

合う1年生が独り言をつぶやきながらキーボードを打っていたり、作品が完成間近になると、友達同士で見合ったりほめ合ったりする姿から、子供のすばらしさを教えられます。

私たちが生き生きと学ぶ子供の育成を目指す中で、コンピュータの効果的な活用について模索して3年が過ぎようとしています。当初はコンピュータがあるから利用するといった意識がありました。しかし、今ではコンピュータを学習の道具として認識することの大切さを実感しています。それは、自分らしさを表現してそれに喜びを見いだす子供、事象や友達、教師にかかわりを求めていく子供、友達や自分のよさを感じ取っている子供、問題を解決しようと地域や他校にまで情報を求め、たくましく学ぶ子供たちの姿を見たからだと思います。

私たちがこれからも追い求める学びは、子供一人一人が自らの課題にじっくり取り組み、自分という幹を大きく太らせ、学び取った力であるきれいな花をたくさん咲かせることです。高度情報化社会の中で生き抜く力を育てたいという願いで、これからもさらに研修を深めていきたいと考えています。

滑川市立西部小学校の実践紹介は、「平成11年度滑川市小学校教育研究会全体研修会 実践研究発表資料」を一部紙面向きに直して掲載させていただきました。



21世紀教育研究所のホームページが ちょっとだけ リニューアル!

ダウンロードできる
スタディタイムの教材も増えました!

21世紀教育研究所のホームページが少しだけ新しくなったのをご存知ですか?

ECONewsのページに、ニュースレター「ECONews」の最新号やバックナンバーをご覧いただいたり、郵送で受け取ることができる郵送会員になる方法をご案内する「ニュースレターECONews」と、スタディタイム教材の概要紹介と教材のダウンロードができる「ECONews登録教材」の二つのメニューをつけました。

「ECONews登録教材」では、ダウンロード可能な教材をどんどんアップデートしています。現在70本以上の教材が無償でダウンロードできます。

教材には【dos】と【windows】の2種類がありますが、dos版スタディタイムをお使いの方は【dos】を、windows版スタディタイムをお使いの方は【dos】(従来の黒いバック)【windows】(windows用の白いバック)どちらでも利用可能です。

なお、dos用教材で今まで不具合があったところなどをwindows用教材で修正を加えている場合があります。windows版スタディタイムをお使いの場合は、新たにホームページからダウンロードし、最新版の教材の利用をおすすめします。



ECONews 郵送会員登録 年間随時 受付中

ECONewsは、21世紀教育研究所のホームページをご覧になるか、または郵送で受け取ることができます。郵送会員には、年会費1000円で、年6回発行のECONewsとECONews教材、スタディシリーズ試用版CDなどを無償で配付いたします。くわしくは、下記の「21世紀教育研究所」までご連絡ください。

21世紀教育研究所

〒305-0045 茨城県つくば市梅園2-33-6
Tel ☎0298-50-3321 ☐☐ Fax ☎0298-50-3330
e-mail econews@green.ocn.ne.jp
URL <http://www.eri21-unet.ocn.ne.jp/>